安永七戌のとし

立秋

前栽の竹ヶ小雨の
浮枝れあつかはしき
そこに一本の柳の
けしき哉

窓あけて扇子の柳けさの秋　瓢五
行水も雨すぎしけさの秋からの　夏羽
吹く風の際までもけさの秋　竹明
おのれしらしすこやぬけさの秋　白斧
あさよりはひょうしんけさの秋　李谷
青田には人も見えやしけさの秋　春稜
初秋や京の栄の暮までは　梅庵
頃を出て、いつ雨けさの秋とて　麦二
秋所や行子子も気か減　宮枝
山くれてかつまんへてけさの秋　以山
木末枝やまた晴しさと実の入れ　梦遊

秋の空たつ浮かれ出て
ここにあらそ秋来るくと
しててのまにふ行来あけるに
逢ふ青柳房ふむしきに
広まのほのかく詠は首
かはくそうしけさ初秋の暮
ほてあかりしやへとこな
らうれは

文水

ゆふつくし日かげ秋所に浮くつけさの秋

七夕

さらしたのあさきまでの
きえに床に綿さしくはれ
秋雨床会に吹しはおとえまて
七夕のあと花なつし

燕尾の雲くまでも晴星の宵　文水
蛍く宿りの露もうすし月　麦羽
咲出のさやてたかし花さしく　梦遊
浮しさやしも京や　麦二
それくにむすの命つ方せずや星　以山
眠らつ床はせへかりし湯　李谷
行ままても知らく虫のやうらさき　白斧
大空も秋さらの暁川　竹明
うつびの情事もあふにこひ抒　宮枝
かつらはさの七夕ての我理　春稜
そのせしそなのすてい川むかしや　瓢五
むかしやとてあの夕暮　梅庵

冬泳

余の星にも雲乱てるかくなれてこれ
まつら浮けその宇留にあけ星一夜
うつえも総一とまれし宵
まさの川の布せん鳴る所星
余の燃とおもく際し天の川
刈照を元れは縦て角こしの恋
余く宗嫁入こて行れしの縁
あの日星のあ水の神まてこう
四方さし星合の雨の庭の子
結びてもん在せんかしの宵

人のんの年ある川の
にしたる星の縁そは
かくくなと

晴たつ方ための縁こしほ
天の川